

阮伯卓の辛亥革命経験

——変容する中国と中国思想をめぐる精神史——

吉川次郎

はじめに 軍人から文人へ

ベトナム近代の知識人阮伯卓（Nguyễn Bá Trác、グエン・バ・チャク、1881-1945）は『南風雑誌』（*Nam Phong Tạp Chí*）の初代漢文主筆として知られている。『南風雑誌』は1917年から1934年まで仏領インドシナにおいて発行され、ベトナムにおける漢文からクオック・ゲーへの知識体系の変革を象徴する雑誌メディアであった¹。阮伯卓はかつての挙人出身であったという履歴や『南風雑誌』での言論活動、さらにその後の阮朝官僚としての立場から、漢文知識人としての印象が強い²が、一方で若き日々には東アジア諸国を流浪し、軍事の知識を身に着けることでベトナムの独立のために役立とうと奔走したこともあった。その自伝的な記録はまた、『南風雑誌』に連載された「汗漫遊記」（1919年第22期－1920年第35期）に結実している。

筆者はかつて、「汗漫遊記」の大まかな内容を整理し³、特にその日本経験についてまとめたことがあった⁴。本稿では、引き続き「汗漫遊記」によりながら、阮伯卓が東遊運動の終焉後、中国にわたりどのような中国観をもつようになったのかを考察する。そこで注目するのは、1911年の辛亥革命およびそれに続く第二革命を自ら経験することによって、その中国観が更新されていくプロセスである。さらに、彼のなかにあった中国思想に対する一つの観念が中国滞在時における行動に作用していたとの記述を重視し、そのことがもつ精神史的な意味を指摘する。そして、最終的には重慶での苛烈な戦場体験が、軍人志向から文人としての再出発をうながす転機となったという見立てについても提示したい。

1 中国入国後の阮伯卓－基礎となる中国観

1910年春に上海から中国に入り、1914年の初夏に広州から香港を経てサイゴンに戻るまでの約5年間、阮伯卓は中国の各地で学び、働き、流浪する日々を過ごした。この間、中国では清朝が倒れ、中華民国が建てられるという劇的な変化が生じていたわけで、阮伯卓はそれを自ら経験することとなった。中国入り直後の「汗漫遊記」にも、「そ

の時期こそは、まさに中国が専制の帝国から共和の民国へと改まる日であり、また、まさに中国が満清の手から漢族に返還された日であった⁵と特記されている。特別な感慨のもとに始められる中国記述のなかで、しかし阮伯卓が中華民国の創立に対する満洲族の貢献についても冷静かつ公平に指摘していたことは、前稿で触れた通りなので繰り返さない。ただ、中国の地理や民族構成、言語、政教、教育、中央・地方の行政制度などを概説するなかで、漢民族の性質と風俗について述べている部分を少し紹介しておきたい。

阮伯卓は「およそ漢文の書物を読む者はだいたいにおいて彼らの性質がどのようなものかを推し量ることができるであろう」という前提につづけて、「しかし、私が遊歴していた際に触れあったところでは、かの国の人びとはだいたい南方人の性質はゆったりとした感じであり、北方人の性質は重々しい感じであった。南方の性質は軽く華やか、北方の性質は純粹素朴である」と自らの経験に基づく地域性の印象を語りつつ、「その勤勉で労苦に耐える習性は南も北もかわるところがない⁶とまとめている。ここでは、ブッキッシュな知識とは一線を画しながらも、しかしそこから自由であるかといえば、一般によくいわれる言説の影響も免れていない図式が見て取れる。ただ、そこからまとめられる「勤勉な中国人」像が阮伯卓の基礎的な中国観を構成していることは間違いないであろう。そのうえで、阮伯卓が特に指摘しているのは、広大な領域、方言の隔絶、あらゆる事情が地域により異なることなどから、「その性質は一律にはできない」という多様性の実感である。

一方、こうした基礎に立って、変化の相としての近代中国の風俗は、次のように描かれている。

ただ、最近の欧化東漸、旧をすてて新をはかろうとする動きもまたひどく急劇である。たとえば、男子では科学の学、女子では纏足の習慣の廃止があった。これは維新においては有益な部分である。それ以外に一般の新しもの好きで古いものをきらう連中の変化はあまりに拙速であり、ついには中国にもとからある礼俗をことごとく廃棄しようとしている。たとえば文明結婚〔清末から民国にかけて流行した新しい様式にもとづく結婚を指す〕や男女平等といった問題が相次いで提唱されている。こうして、礼儀は損なわれ、道徳は退廃し、国中の見識をもった人びとは〔中国が〕日々落ちぶれていく悲しみを免れることがないのである⁷。

この引用からは、阮伯卓が中国における新旧や男女、あるいは東洋と西洋のバランスについて、どのような感覚をいただいていたかをうかがい知ることができる。

そこから先、伝統におけるベトナムとの共通性を認め、中国文化を根底において背負っている阮伯卓が、中国の多様性やさまざまなバランスをめぐる価値観をベトナムに投影する場面で、どこに境界線を引き、どこに重点を置こうとするのかは、彼の精神史ともかかわる論点の一つとなる。

2 辛亥革命の経験と変容する中国

阮伯卓は上海・南京でのさまざまな出会いを経て、桂林の広西陸軍幹部学堂で本格的に軍事知識や技術を学ぶことになった。それは、軍事を通じてベトナム独立に貢献しようとする、東遊運動に参加したベトナム人たちの大きな流れに沿うものでもあった⁸。桂林での学びの成果を実地に試す機会がより現実味をおびて迫ってきたのが、1911年10月の辛亥革命の勃発である。その当時のことを「汗漫遊記」では次のように記している。

私は桂林を離れ、再び漓江をくだった。船が転覆したものの救助され、梧州にいたったところで、湖北の民軍が蜂起したことに聞き及んだ。私が急いで香港にもどると、すでに通りには漢〔民族〕の旗がひるがえり、そこには「興漢滅滿」の四文字が大きく書かれていた。ところが、そのときには広東政府はまだ覆っていなかったのである。つづいて翌日、広東の省城〔広州〕が光復したとの知らせが香港につたわると、香港の住民は狂ったように駆け出した。だれもが手に旗を持っており、その旗は四角に青地、真ん中に白色を残したもので、この度の国民の行動が青天白日と同じく公明正大であることを表していた。路上で叫び、四辻で飛び跳ね、「民国万歳」「大漢万歳」の声が街全体に響き渡った。現地の人にきけば、これほどまでに盛り上がった祝賀の場面はかつてなかったという。普段は家から出てこない女性たちも、この日には男たちの群衆に入り混じって、通りを練り歩いた。ほとんど万歳を叫び拍手することが、だれ一人として逃れることのできない国民の義務であるかのようにだった。西洋人の男女も漢の旗を手によるこびを伝え、子供たちは列を組んで進んだ。中環〔セントラル〕の市場や海沿いの大通りは人で埋め尽くされたため、路面電車は運行を停止した。ああ、天理は人心にありというのはまさにこのことである。私は香港に数日間滞在してから広東の省城へむかったが、その折、中国の漢族は流血の手段によって満洲族をひっくり返したものの、双方の戦地は、ただ武漢の風雲や金陵〔南京〕の剣馬において生じたにすぎなかった。そもそも各省では、数十人の志士たちの遊説の功績によって、軍隊は寝返り人々は歓迎したのであって、行われた革命の功績とは、旗を掲げたり、通りを行進したりといったことにしかみられなかった⁹。

ここでは、香港や広州で目にした群衆の熱気とともに、自身が思い描いていた革命のイメージとは異なることも率直に述べられている。桂林で「武」を学んだにもかかわらず、今回の「光復」は革命家たちの演説による「文」の勝利であったとの認識である。そのことのもの足りなさは、次のような批評につながる。

そもそも、王朝や〔支配〕民族の交替は国家の一大変革である。ところが、中国の今回の「滅満興漢」「共和〔国〕建設」の挙は、いかにもたやすく得られたのである。広東の省城についていえば、一個の弾丸も使わず一人の血も流さないままに、昨日は大清皇帝の命令に屈服していたものが、今日にはことごとく大漢民族の主権に掌握されたのである。今回の革命で民国が支払った対価は安すぎたという者もいる。であればこそ、将来になしとげられる成果もまたちっぽけなものとなり、わずか数年で北京に帝政の運動がおり、さらにわずか数年にして南北戦争〔護国戦争〕の状況を演じることとなったのも、あるいはそのせいかもしれない。敗北した日に当局者は傍観していたのであり、成功のときにはどんな取るに足らない者も志士になれたのである。ちょうど光復となったとき、広東の長堤〔珠江北岸の西洋建築がならぶ商業区域〕のホテル・旅館に、車や馬車がぎっしり集まったのは、どれも志士や革命党人のあとを追いかけてのものであった¹⁰。

こうした書き方は、「汗漫遊記」執筆時点での評価、すなわち辛亥革命以降に生じた混乱の連続への幻滅を加味したものであることはいうまでもない。ただ、中華民国の歩みへの苦い振り返りとは別に、このときの「もの足りなさ」が強調された背景には、阮伯卓がこの機会を通じて、桂林で身に着けた軍事の知識を実地に試す「革命戦争の実習」という企図が果たされなかったことがある。それは本来、将来のベトナム独立の戦いにもつながるものであった。

阮伯卓はその目的を果たすために、広州で民軍の組織化に従事し、さらに北伐軍への参加をめざした。

私はここ〔広州〕に一月いて、学友の某某とともに民軍を組織する仕事に奔走した。そのときには広東の省城にいる陸軍はすでに民党の所管となっており、満洲族の各士官はといえはもはや相次いで香港に逃亡し、イギリス政府の個人的保護を求めていたのだった。国内で変乱がおきれば、盗賊もまた機に乗じて蜂起するので、民党は現地の治安維持をはかるため、民軍を増設したり、陸軍を派遣して惠州・順徳・香山・東莞などの各地を守らせたりした。要するに、このときには広東の軍隊は、土匪を掃蕩し防ぐ以外には、武力を行使するようなことがなかったのである。それにつづいて、北伐軍の組織を提唱する声がおこったが、その目的は漢江上流で軍をあわせ、北京を直接叩こうというのである。ことに当たる者の部署が定まると、私はある学友にしたがって、まず上海を経由して湖北に向かい、別の方面から北伐の隊列に参加協力しようという約束をとりかわした。旧曆十一月のある日、私たちが上海に到着すると、中国の臨時政府はすでに南京に成立しており〔正式な成立は1912年1月3日（旧曆十一月十五日）〕、陳某〔陳其美〕ももう上海県に割拠していた。私に陳某のもとに身を投じてはと勧める者もあったが、私は「自分がここにきたのは、旧友をたずねてそこに身を投じるためではない。戦地を見出

し、私が学んだことの実習をしたかっただけなのだ」と述べ、さらに南京に行き、北伐軍の出発を待つことになった。

〔中略〕私は学友と南京で数か月を過ごした。そのとき、南北はもはやそれ以上戦争を起こさず、何々北伐軍や何々決死隊などというものは、たんなる名目に過ぎなくなっていたのである。私は革命軍の決起をきいたとき、自分たちは〔広西陸軍幹部学堂〕卒業後にこんなすばらしい実地の演習場を得た、その間に跋涉し従軍していれば、あるいは軍事上の知識を増進させることができるやもしれぬと考えた。そうして、まず広東、次に南京、さらに湖北へとやってきたわけだが、烽火砲煙の局面はいずれにおいてもすでに収束し、同行した広西の学友七八人のあいだではいつも「俺らは福の神だな、いくとどこどこでも天下泰平になっておしまいさ」とふざけて言い合ったものである。1912年の3月になって南北の和議が成立した。孫文は辞職して、公式に推挙されて袁世凱が臨時大総統となり、政府を北京に移転した。民党もあいついで北上し、私もまたこのときに学友たちと連れ立って燕京〔北京〕に赴き、とある新聞社に身を投じたのである¹¹。

こうして、阮伯卓は軍事の経験を積むことなく、ひとまずは再び「文」の世界に従事することになったのである。

3 北京の描写：中国の北方と南方

阮伯卓の北京の描写は、中華民国の建国によってうまれた新たな潮流を意識した書き出しとなっている。

北京は中国の首都で、直隸順天府に属している。すなわち、古代には燕の召公が封じられた地であり、遼（名称は南京）・金（名称は燕京）・元（大都）・明、清（北京）の五つの王朝がここに都をおいた。残念なことに、今回私がやってきたときには、もはや専制時代の官庁の儀仗兵は見られなかった。だが、帝王の宮殿や王侯の邸宅はあたかも以前のままでのようで、そこに新たな「王朝」の風景がくわわることによって、都市には相当な活気があり、まことに我らがアジアの一大国の名だたる都であった¹²。

時代の変化の背景には、共和革命の精神が流れており、その観察はたとえば建物の様子についての次のような描写にもあらわれている。

〔かつての北京で一般の住宅に高さの制限があったことに触れ〕ああ、専制時代が人民を束縛するのはどうして思想や言論にかぎったことであろうか。その住居にいたるまで、肩身の狭い思いをしなければならないのである。近頃〔「汗漫遊記」

執筆時点の1920年頃か)、私は北京から南〔ベトナム〕にやってきた中国の友人に会ったが、北京の現在の様子を尋ねたところ、彼はこの六七年来、北京各所の新しい建築物は盛んに西洋式を模倣し、かつてと比べれば知らない間に天地の差がうまれている、という。つまり、最近の中国の情勢は、西風を東側がうけるかたちであらゆるものが急激に更新されているのである。国家・政治の方面についていえば、進歩しているかどうかは実際のところわからない。だが、社会方面でいえば、都市の貿易・人民の建築には実に一日千里の進展がある〔上海市でも、阮伯卓のベトナムへの帰国二年後に再訪すると、大型娯楽場である新世界・大世界が相次いでつくられていたという〕¹³。

ここでは、中国の政治上の変化はさておき、社会の地殻変動が確実に起こっていることが指摘されている。そうした社会の変化を如実に映し出す鏡として阮伯卓が着目した要素の一つは、女性をめぐる状況であった。日本滞在時の描写でも、東京の都会の各層で働く女性の姿が紹介されていたが、中国到着後の上海においても、都市化とともに街頭に躍り出た女性の様子が描かれていた。それでは阮伯卓の目に映じた北京の女性はどうであったか。

〔北京の〕女性をめぐる状況は南方各都市の女性たちの習慣とはまったく逆となっている。北方の上流女性はめったに家を出ず、南方の広東や上海各地で夕暮れどきに連れ立って街へくりだし、その衣服のきらびやかさを競うような雰囲気はまるでない。満洲人の女は頭髪を結わえ長く扁平にして頭上に横たえており、それがまるで帯冠のようで、見ていてとても興味深い。とくに異質であるのは、中国の女がみな纏足をしているのに、ただ満洲の女だけはみな「天足」で、自然のままに誰一人として纏足をする者がいないことである。彼らは漢種の陋習をみて、真似をせずに天足を行い、厳禁することなく纏足を取り去ったのであろうか¹⁴。

先に中国の南北の気風の違いについての視点があったことを述べたが、ここでも女性への観察をとおして、南北の性質の違いを分節しようとする構えがみられる。女性の社会進出や纏足の有無への言及は、そのまま阮伯卓がいだく南方の開放性と北方の保守性というとらえ方や、満洲族への前向きな評価に直結するものであった。

一方、社会の激変にくらべてその進歩のほどは定かではないとされた民国初年の北京の政治状況であったが、阮伯卓は北京ではジャーナリストとして働いていた関係上、政治動向の推移とも決して無縁ではなかった。当初、談論風発の活気ある言論空間ととらえられていた北京の空気が、袁世凱政権の統制が強まるにつれて凋落してくさまは、次のように描かれている。

民国初年の北京において、もっとも意気盛んであった人々とは、両院議員および

党務にいそしむ政客たちであった。毎夕、五六時に各会館〔北京におかれている各省の共有施設〕や各機関紙に相集い、立派な議論を大いにたたかわせたが、それは各議員・各政客が意見を交換し共有するひとときであった。そうして、八九時になった頃、これらの光景はそのまま八大胡同の宴会の場へと移された。当初、中国の政党で最も勢力をもっていたのは国民党で、次が共和党、さらに進歩党もそれに続いて隆盛となった。私は北京にいた頃、いつも国民党の諸君子とともに過ごしていた。彼らの熱意はきわめて盛んで、その団結力も強大なものであったが、思いもよらないことに数年を経ずして、袁〔世凱〕政府に容れられなくなり、まもなく北京から姿を消すにいたった。共和党はそれ以前に国民党と対峙していたのだが、民党が駆逐されるに及んで共和党もまた「免死して狐悲しむ」の感を免れなかった。私が北京を離れるとき、北京で政党人の旗を掲げて進取をはかろうとしていたのは、わずかに進歩党のみであった¹⁵。

やがて北京の政治状況が急激に悪化するなか、阮伯卓は逃れるようにして北京を去ることになるが、それが続く第二革命への参加につながっていくのである。

1913年の4月から5月頃、北京の各党派・新旧の争いは熾烈をきわめ、政治上の雰囲気は見通しが悪かった。ある日、前門の警備兵が驚くべき緊張をうみだし、疑心暗鬼の気配がいたるところに見られた。そのとき、北京で大総統の地位にあった袁世凱はきわめて冷静な態度を装って、何事もないと衆人に示した。毎日朝に夕に二人の子息をつれて三海〔北海・中海・南海〕を散歩してのんびりと時を過ごし、自ら「曹家父子〔曹操・曹丕・曹植〕もこれほどではあるまい」と言っていた。だが、外部では警備網が張り巡らされ、偵察の馬が次々と駆け出し、北京滞在の人びとは誰もが不安におののいた。たまたま新聞社の同僚某は南方の議員であったが、私に一通の手紙をみせつつ、民党はすでに南京で第二革命をとらえていると告げ、私に南方へ戻るように頼んだ。私はただちに某の依頼をうけると、支度を整えて上海に戻った。そのとき北京から天津までの片道の行程で五六回も検問を受けたのを覚えている。だが、幸いなことに無事に天津の入り口に到着し、そのまま船で上海へと帰ったのである¹⁶。

4 第二革命への参加

(1) 「局外者」と最後の一論：「朋友」倫理

出国以来の阮伯卓の長い流浪の道のりは、ベトナム独立運動や日本のアジア主義、中国革命などのさまざまな人間のネットワークに支えられてのものだったが、北京脱出後の阮伯卓が自らの立ち位置について表明した興味深い一節がある。

人生において、父母の下で子としての役割を果たすことができず、さりとて祖国に身を置いて臣民としての義務を果たすこともできず、異国を流れさすらって朋輩を頼りに暮らす。であるならば、朋輩に対する義務があつてしかるべきだ。要するに、このとき、五倫〔君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友〕のなかで直接私の眼前にあつたのは、ただ「朋友」の一倫だけだった。道理で、私がいろいろな中国人の友に託されて東奔西走し、生死の境をくぐって顧みなかったのは、実にこうした感情の働きによるものだったのである。それ以外の、かの国の人びとのいう党派の争いや政見の異同などは、私には何の関係もなかった¹⁷。

ここで述べられているのは、自身が中国革命にとっての「局外者」である、ということの単なる表明ではない。政治的立場や党派という点ではあくまで「外」の存在であるが、一方で、中国の文化や思想の枠組みにおいては、その価値観を深く内在化させている、そうした「内」の自己認識が語られているのである。

さらに中国の思想的文脈において考えた場合、この最後に残された「朋友」という一倫はまた、決して伝統思想の中に埋没するものでもなかった。中国近代思想において、五倫のなかで「三綱」（君臣・父子・夫婦）の抑圧性を排撃すると同時に、ひととき「朋友」の倫理的価値をたかめた存在に、譚嗣同の『仁学』があつた。戊戌変法運動の精神的な象徴ともなった同書は、日本亡命後の梁啓超が発行した『清議報』などに掲載されることで世に伝えられたが、そこでは「朋友」の価値について端的に次のように語られている。

人生において、五倫のうち朋友こそが、最も無害有益、苦はずこしもなく、水のごとく淡々たる楽しさがある。〔中略〕一には平等、二には自由、三には、制限するも発展するも意のままであること。〔中略〕人倫は五つあるが、自主の権を完全にそなえているのはこの一つ、なんとしても大切にしなければならない¹⁸。

もちろん、先の引用文中で阮伯卓は、本来であれば、父子や君臣の義を果たしたいと述べており、儒学におけるそれらの価値を否定するものではなかった。また、「朋友」の一倫のみが残されたのも、流亡生活のなかでそれを余儀なくされた結果であつたともいえる。だが、あくまでも筆者の仮説だが、残された「朋友」の義務を果たすために、生命をも危険にさらすというときに、阮伯卓が譚嗣同の『仁学』からさらに積極的な意味づけを受け取ろうとした可能性もあつたと考えられる。阮伯卓は中国経由で流入するいわゆる「新書」の影響を受けた世代であり、そうした新書のなかには康有為や梁啓超ら維新派の書籍も大量に含まれていた¹⁹。つまり、この「朋友」倫理の強調が暗示しているのは、広大な東アジアの領域を移動するなかで、近代の洗礼を強烈に受けつつあつたベトナムの知識人阮伯卓が、自らの実際の経験に即したかたちで、先行・並走する近代中国思想からの取捨選択を行っている一場面なのではなからうか。

(2) 重慶での戦場経験：軍人から文人へ

上海にたどりついた阮伯卓は、中国革命のネットワークの一員として、第二革命に参加すべく、まず南京へ、さらに敗色濃厚ななかで戦場である重慶にむかう。途中、通過した漢口〔武漢の一部〕では、フランス租界のベトナム人警備兵の姿に言及し、中国革命にとっての「局外者」としての自身の姿を示しつつも、その後も同行者から離脱することなく、苦難の連続のはてに重慶へとたどり着いたのであった。

私は上海に到着すると、すぐに南京にむかったが、民党はすでに敗北しており、孫〔文〕・黄〔興〕は異国の地に退避していた。北軍は浦口にまで迫り、城内には命令を発する責任者がおらず、人心はみだれていた。南京城ではまだ戦争は発生していなかったものの、危険な状況はほぼ間近であった。たまたま学友であった湖北人の張君が南京軍営の長官をしていたが、私に南京にはいけないと告げた。私はそこに数日間とどまり、再び上海へと戻った。上海に戻った後、四川の謝某の要請で、ほどなくして四川の友人五六名と同行して四川の重慶に行った。このとき重慶は南京について蜂起しており、東方での失敗を西方で挽回しようというのが民党の計画だったのである。

〔中略〕私たちは7月初旬に、上海から船に乗り漢口に到着した。そのとき武昌はすでに北方政府の命令を受け、戒厳令を宣布して臨戦態勢で民党の検問をおこなっていたが、私の同行した中国の友人たちはいずれも民党中の有名人であった。そのため、漢口の日本旅館に投宿することになったのだが、それはその地が外国租界であり、民国の警備兵の臨検を受けないからであった。〔中略〕各国の租界は長江沿いにあったが、フランス租界の繁栄ぶりは上海に劣らなかった。その地に駐在し、巡検する我が南人〔ベトナム人〕の警備兵がいるのをみかけたが、私の行動がきわめて微妙なものであったため、彼らと異郷の同胞としての気持ちを語り合えなかったことは、いかにも残念であった。

〔中略〕7月末にいたって重慶府にたどりつき、城内に入ると大江東旅館（このとき熊氏はこの旅館を民党の接待所として借り受けていた）に泊まることになった。旅館の人にきくと、重慶軍は合江で貴州軍と交戦したが、すでに戦況は不利に陥っており、重慶城の主将はすでにこの地から退避して遠くへ逃げ去ったという²⁰。

桂林で正規の軍事教育を受け、辛亥革命に際しては戦場での経験をつみたいと願っていた阮伯卓であったが、観戦に訪れた重慶ではついに命の危険に直面することになった。その緊迫した生々しい叙述を、以下に引用したい。

〔貴州兵が重慶の包圍攻撃を開始した〕この日、城内の各店舗は休業し、まるで元宵節の夕べのように銃声が断続的に鳴り響いた。いたるところで砲声聞きこえ、

通りのところどころに血痕があったが、それは春節をむかえた家々の地面にちらばる〔爆竹の〕紅色では決してなかった。そのとき、私は衛戍司令部を出て角をまがったところ、道の片隅で乱兵数名に遭遇した。私にむかって激しく銃撃してきたが、幸いにも私はあらかじめ拳銃を手に自衛していたので、闘いつつ逃げつつ、退路を切り開いて宿舎に戻ったのを覚えている。帰り着いて銃を調べてみると、十発の弾丸はすべて撃ち尽くしていた。

夜になって、私は江東旅館に宿泊していたが、まだ休む前にいきなり轟然と砲弾が私の前をかすめて寝室の壁をつらぬき、跳ね返って近くのガラスをたたき割った。私は灯火の前に独り座って、いつまでも寝付かれず、わが身の来し方をふりかえり、家や国を想う気持ちが強く沸き起こった。ああ、何のためにこんなところまでやってきたのか。どんな恩義があって、どんな恨みがあって、わが身を軽々しく扱うのか。もし今日、司令部の入り口に大きな砲弾が落ちてわが身を吹き飛ばし、もしくはくずれた壁が私を頭上から押しつぶせば（このとき貴州兵は司令部を攻撃目標としていた。先に私が司令部を出たところ、突如、巨大な砲弾が付近の壁を打ち倒したが、幸い被害を免れていたのである）、それで終わりではないか。もし、街の乱兵が槍や刀を使って狭い路地裏で私を刺してしまえば、それでもおしまいである。たとえそうならなくても、その間に一発が壁に穴をうがちガラスをつき破るかわりに私の頭をたたき割れば、それでも終わりなのだ。ましてや今夜から明日、明日からこの地を離れる日までに、はたしてわが身の危険から逃れることができるかはわからない。たとえ血を流して故郷にたどり着けず、その埋もれた七尺のからだをはるかな戦場に投げうったとして、どれほどの価値があるのか。そこまでことばにしたとき、親を想って涙がぼろぼろとこぼれ落ちた。いまも覚えているのは、この夜に私は手を合わせ、天を仰いで「危地を脱して必ずや帰国し、ここで流浪の生涯を終えませぬように」と祈ったことである。そう、私の帰国の決断はまさしくこの危険な夜にくだされたのだった²¹。

ベトナム独立運動のために軍事を志向し、中国革命に参加してきた阮伯卓は、こうしてその長い流浪の生活を終え、帰国の準備を始めることになる。阮伯卓の履歴に徴すれば、帰国という選択の先にはフランス植民地政府からの刑罰や投獄が待ち受けているのだが、苛烈な市街戦の経験がこの転向をもたらしたといえよう。それは、ベトナム独立運動家から植民地官僚への転身のみならず、軍人から文人へ、中国からベトナムへ、北方から南方に回帰する転換点となる瞬間でもあった。

おわりに 南方への傾斜

「汗漫遊記」の最終回は、一旦は次のように結ばれている。

この三四か月間、私は北京から上海に帰り、さらに上海から宜昌へ向かい、宜昌から重慶へと赴いた。そして、重慶より上海へ帰ってきた。すべてはむなししい行程であった。通り過ぎてきたところは、南方の作戦区域であったり、北方の駐留地域であったりしたが、しばしば双方の防衛・戦闘の境界線上を出入りし、その道行の危険度は例えようがなかった。9月初旬に無事に上海に到着し、ここに数か月を過ごした。西暦1914年の正月になるとすぐ上海から広東にもどり、帰国計画の準備を始めた。7月の初めになって私は香港に行き、船を探してサイゴンに帰った。帰国後の数日目がヨーロッパで大戦の始まったことをきく日となった。私の汗漫遊はここで終わりである²²。

第一次世界大戦の開始という世界の歴史を大きく画する変動のさなかに、阮伯卓はベトナムへの帰国を果たしたのであった。ところで、この最終回の後には、さらに「第十四章 広東の省城」というかたちで補論が追加されている。その理由としては、広州が最後に訪れた都市であったという以上に、5年間にわたって中国各地をめぐり、上海や南京、桂林、北京、重慶などの各都市の相貌をつづってきたなか、いよいよ南への回帰を決断したときに、とりわけベトナムとのかかわりの深い広東の記述を欠かすわけにはいかないという判断が働いたのであろう。それは、広東の人びとの性質や風俗を描写するにあたり、「この〔広東〕省はわが北方国境に隣接し、我が国の華僑も広東人が多数を占めている。我々がこの省の内地に住む人びとの性格や風俗について少し知っておくのも、また無益なことではないだろう」²³と記していることからもうかがえる。

阮伯卓は広東人に対して、「民智がひらけており、労苦によく耐える」ために、世界のあらゆる地域にひろがって多くの人間が暮らしを営んでいると高い評価を与えている。また、「広東人は男性が商業にたけているばかりか、女性も近ごろは社会の事業に従事できている」として、繊維産業やその他軽工業関連の職場で働く若い女性たちの仕事ぶりを賞賛する。一方で、広東人の婚姻儀礼の煩雑さについては批判的で、外国人からみて低評価であるだけでなく、中国国内の志の高い人々も改善につとめている現状を紹介している。ただ、その際も「わがハノイでもいまなお多くの人間がそういった習慣を見習おうとして、奇抜さや美しさを競っているのは、実に厭うべきことである」という具合に、ベトナムの現状に引きつけ、共通の基盤に立ってとらえる視点が明確に示されていた。

本稿でたどってきたように、中国の南北各地を比較する視点は、最終的には南方に収斂し、その延長線上でベトナム自体の課題と結びついていくことになる。その共通の課題とは、上海や広州の地域文化が、急激な都市化と西洋化のなかで本来の姿を変えていったのと同様に、フランスの植民地統治下でベトナムのあり方が大きく変容していくことに、同じく近代を生きるアジアの知識人としてどう向き合うのかという点である。広東文化のなかの結婚への言及においても、「早婚」や「童養媳」（幼女をもらいうけて自家の男子に嫁がせる風習）が旧来の悪習であるという評価を紹介しつつも、いわゆる

「文明結婚」や「自由結婚」については、阮伯卓は批判的であった。ベトナムへの帰国後に振り返られた「汗漫遊記」には、同時代の中国を実地で経験してきたからこそ語ることのできる中国観とともに、中国文化を自らの根幹として強く持つ近代漢文知識人としての阮伯卓の精神史が惜しみなく表現されている。

本研究の一部は、2020年度中京大学内外研究員制度（その他の研究員）の支援を受けたものです。

注

- 1 岩月純一「『ベトナム語意識』の形成と『漢字／漢文』－『南風雑誌』に見る」『東南アジア－歴史と文化』24号、山川出版社、1995年。
- 2 宮沢千尋は、植民地期ベトナム知識人を3つの世代に分類するベトナムの社会史家チン・ヴァン・タオらの議論を紹介しているが、阮伯卓については第二世代の「開明的儒教知識人層」に相当するとみられる。それは「自らは儒教的教育を受けているが、ベトナムの植民地化に対抗するため、あるいはベトナムを近代化するために儒学を批判して西欧近代的知識の普及に努めた者たち」を指す（宮沢千尋「フランス植民地期のベトナム知識人ファム・クインの「言語・文化ナショナリズム」と西洋哲学思想観」廖欽彬・伊東貴之・河合一樹・山村奨編著『東アジアにおける哲学の生成と発展－間文化の視点から』法政大学出版局、2022年、803-806頁）。また、廖欽彬は阮伯卓の『南風雑誌』第1期創刊号の「南風雑誌披露」の内容を引きながら、その立場が「漢学と西洋学を融合して、ベトナムの学問（南学）を創造すべきである」というものであったと紹介している（廖欽彬「植民地期ベトナムの思想状況と哲学の受容－『南風雑誌を中心に』」『東アジアにおける哲学の生成と発展』同上、823-824頁）。
- 3 拙稿「阮伯卓「汗漫遊記」（1919年4月-1920年5月）について」『国際教養学部論叢』（中京大学国際教養学部）第7巻第2号、2015年3月。
- 4 拙稿「阮伯卓の日本滞在」『中京大学国際学部紀要』（中京大学国際学部）第3号、2022年3月。
- 5 阮伯卓「汗漫遊記」『南風雑誌』第28期、1919年10月、115頁（原文テキストは南山大学名古屋図書館所蔵のマイクロフィルム版を使用、以下同じ）。また、「汗漫遊記」はすべて漢文で書かれているが、本稿の日本語訳文はすべて筆者（吉川）による。
- 6 同上、122頁。
- 7 同上。なお、引用文中の〔 〕は筆者による補足・省略を示す（以下同じ）。
- 8 拙著『近代中国南方のメディア言説－辛亥革命期の雲南・広西とベトナム／日本』風響社、2020年、275-280頁。
- 9 阮伯卓「汗漫遊記」『南風雑誌』第33期、1920年3月、97頁。
- 10 同上。
- 11 同上、97-98頁。
- 12 阮伯卓「汗漫遊記」『南風雑誌』第34期、1920年4月、139頁。
- 13 同上、141-142頁。
- 14 同上、142頁。
- 15 同上、142頁。

- 16 阮伯卓「汗漫遊記」『南風雑誌』第35期、1920年5月、169-170頁。
- 17 同上、170頁。
- 18 蔡尚思・方行編『譚嗣同全集』増訂本、中華書局、1981年、349-350頁（引用の日本語訳は、西順蔵・坂元ひろ子訳「仁学（抄）」村田雄二郎責任編集『万国公法の時代－洋務・変法運動』（新編原典中国近代思想史2）、岩波書店、301-302頁）。
- 19 なお、阮伯卓は1920年代に設立された古学院の蔵書目録の改訂・編集に加わったが、そこには19世紀末から20世紀初頭にかけての出版物が「新書」のカテゴリーのもとに収録されているという（阮南（張政遠訳・宮沢千尋校閲）「国境を越えて旅する知一二〇世紀初頭のベトナム、そして日本と中国からの出版物」『東アジアにおける哲学の生成と発展』前掲、776-778頁）。また、『近代中国南方のメディア言説』前掲の86-87頁に載せた書名一覧にも、20世紀初頭にベトナムに流入した維新派の著作名が散見される。
- 20 阮伯卓「汗漫遊記」『南風雑誌』第35期、前掲、170-173頁。
- 21 同上、173-174頁。
- 22 同上、175頁。
- 23 同上、177頁（以下、広東についての引用も、同上177-180頁）。